夏目漱石著「私の個人主義―文芸と道徳―」講談社学術文庫 1978 年 8 月 10 日刊を読む

１．以上を総括して今後の日本人にはどういう資格が最も望ましいかと判じて見ると、実現の出来る程度の理想を懐いて、ここに未来の隣人同胞との調和を求め、また従来の弱点を寛容する同情心を持して現在の個人に対する接触面の融合剤とするような心掛――これが大切だろうと思われるのです。　P117

２．我々人間としてこの世に存在する以上どう藻掻(もが)いても道徳を離れて倫理界の外に超然と生息するわけには行かない。道徳を離れることが出来なければ、一見道徳とは没交渉に見える浪漫主義や自然主義の解釈も一考して見る価値がある。この二つの言葉は文学者の専有物ではなくって、貴方方と切り離し得べからざる道徳の形容詞としてすぐ応用が出来るというのが私の意見で、何故そう応用が出来るかというわけと、かく応用された言葉の表現する道徳が日本の過去現在に興味ある陰影を投げているという事と、それからその陰影がどういう具合に未来に放射されるであろうかという予想と――まずこれらが私の演題の主眼な点なのであります。

P119

［コメント］

夏目漱石の道徳論として最もわかりやすい講演のうちの一つが、この大阪でのものだと思う。

１．実現の出来る程度の理想を懐くこと

２．ここに未来の隣人同胞との調和を求めること

３．従来の弱点を

①寛容する同情心を持して

②現在の個人に対する接触面の融合剤とするような心掛け

＊これが大切。

是非、心掛けたいものだと思う。

― 2009 年 3 月 22 日林明夫記―